

“がんの検査って 何をするの？”



Vector Open Stock

がんの治療を開始する前には、**がんの正確な部位・大きさ・性質、全身の状態、転移の有無**など、あなたの現在の体の状況を調べます。「早く治療をしてほしい」と思う気持ちがあるかもしれませんが、**体への負担を最小限にしつつ治療効果を最大限に得られるようにすることが大切です**。そのために、いくつかの検査を組み合わせる場合があります。

○問診 今までにかかったことのある病気、家族歴、生活習慣などお聞きします。

○血液検査

・腫瘍マーカー：

がんがあると血液や尿中に健康な人にはあまりみられない特定の物質が変動することがあります。そのような物質を「腫瘍マーカー」といいます。多くの腫瘍マーカーはがんがあれば必ず増えるとは限りません。正常な状態や良性の腫瘍の場合にも増えることがあるため、腫瘍マーカーの結果だけではがんを診断することはできません。目安の数値として評価します。

○画像検査・画像診断

・超音波（エコー）検査：

超音波を発する装置を当て、音波のはね返る様子を画像にすることで体内の状態を観察します。

・X線（レントゲン）検査：

胸部、骨・軟部、乳房、腎盂（じんう）・尿管、上部消化管（食道、胃、十二指腸）、下部消化管（大腸、小腸、直腸）などの検査があり、バリウムや造影剤等を使ってより詳しく調べることもあります。

・CT（コンピューター断層撮影）：

体の周りからX線を当てて、体の断面像を観察する検査です。

・MRI（磁気共鳴撮影）：

体に強い磁力（磁場）を当て、体の断面像を観察する検査で、CTでは撮影しにくい部分も撮影することができます。強い磁場を発するため、ペースメーカーや金属類を体に埋め込んでいる方は検査ができないことがあります。主治医にお申し出ください。

※CTとMRIは、造影剤を腕の静脈から注入または内服し、病変をより鮮明に写し出す場合がありますが、造影剤にアレルギーがある方は主治医にお申し出ください。

- ・PET（陽電子放射断層撮影ーポジトロン・エミッション・トモグラフィー）：
がん細胞の活動において吸収されやすい薬剤に、弱い放射性物質を付着させ、体内に
おける薬剤の分布を撮影することで、薬剤を取り込んだがんの様子を調べる検査です。

※当院ではPETの設備がないため、PET検査を実施している医療機関を紹介し検査を受けていただいています。

・骨シンチグラフィー：

骨折、骨の炎症、骨腫瘍やがんが骨へ転移していないか、その他の骨の病気について行う検査です。骨シンチグラフィーはテクネチウム（ ^{99m}Tc ）というラジオアイソトープを含んだ薬剤を注射して行う核医学検査です。この検査は注射した薬剤が、骨の代謝や反応が盛んなところに集まる性質を利用して、骨腫瘍や骨の炎症、骨折の有無などを調べます。乳がん、肺がん、前立腺がんなど治療前・治療後の経過を確認する上でも行う検査です。

○内視鏡検査・内視鏡診断

カメラのついた細い管を体の中に挿入し、消化管（食道、胃、十二指腸や大腸）、気管、膀胱などを体の中から観察する検査です。病変を直接観察したり、病変の一部をつまみ取り（生検）、病理検査を行うことができます。

○病理検査・病理診断

組織を採取して細胞の性質を調べる、がんの診断には欠かせない検査です。がんが疑われている病変から細胞や組織を採取し、病理医が顕微鏡で観察して、がんであるかどうか、がんであればどのような種類か調べて診断します。口腔、気管、膀胱、子宮などの粘膜上からヘラやブラシのようなものでこすり取ったり、皮膚から針を刺して吸引したり、また痰や尿などの液体中に浮遊している細胞を採取する方法などがあります。

※参考 HP：がん情報サービス <https://ganjoho.jp/public/index.html>

日本大学医学部附属板橋病院 がん相談支援センター

〒173-8610 東京都板橋区大谷口上町 30-1

TEL: 03-3972-0011（相談直通）0570-01-8111（ナビダイヤル）